

(社)東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music
第 47 号 (2003 年 8 月 22 日)

定例研究会のご案内

第 215 回定例研究会(日本音楽学会関西支部例会と合同)

と き: 2003 年 9 月 20 日(土) 13:00~17:00

ところ: 大阪音楽大学 K 号館

(阪急宝塚線庄内駅下車、北西へ徒歩 8 分の本校よりスクールバス)

(地図: <http://www.daion.ac.jp/pre/access/frame.html>)

内 容: 研究発表 谷本裕「PMF の理念と現実」

シンポジウム「阪神・洋楽・1930 年代」

第 1 部 渡辺裕氏による『日本文化 モダン・ラブソディ』についての発表と、鎌谷静
男氏による S P 盤『林中の鍛冶屋』大阪市民館管弦団の背景についての発表

第 2 部 谷村晃氏と馬淵卯三郎氏に聞く

コーディネイト・司会: 藤田隆則、今田健太郎、上野正章

第 216 回定例研究会

と き: 2003 年 11 月 22 日(土) 14:00~17:00

ところ: 大阪大学文学部 文 13 教室

(阪急宝塚線石橋駅下車、南東へ徒歩 15 分。大阪モノレール柴原駅下車、西北へ徒歩 10 分)

(地図: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/faculty/index.html>)

内 容: 書評 『ピアノを弾く身体』岡田暁生監修、春秋社刊を読む

パネリスト: 椎名亮輔

小塩さとみ

伊藤友子

司会: 藤田隆則

定例研究会記録

第 213 回定例研究会

日時: 2003 年 4 月 19 日 13:00~16:00

場所: 国立民族学博物館 第 3 セミナー室

内容: 論文発表・展示見学

卒論発表: 星村倫子「奄美諸島における民謡教育の実践例とその考察」

修論発表: 桑原瑞来「創作和太鼓 - 関西における現状の分析 - 」

研究発表: 福岡正太「民俗音楽から民族音楽へ - 小泉文夫の民族音楽学の展開」

展示見学: マンダラ展(自由見学)

「奄美諸島における民謡教育の実践例とその考察」(京都教育大学卒業論文)

要旨:

1. 研究の動機と目的

奄美諸島において、奄美民謡を教育の現場や地域の教室などで、現代の子どもたちに伝承している実態を是非調査したいと思った。そして、自らの教育活動の中で、我が国や郷土の伝統音楽を指導する際や、和楽器指導の際に、この研究で得たことを活かしたいと考えている。

2. 研究の概要

名瀬市の平田保育所（奄美大島）、名瀬市立伊津部小学校「さざ波バンド」（奄美大島）、住用村立東城小中学校（奄美大島）、天城町立西阿木名小学校三京分校（徳之島）、伊仙町立犬田布中学校（徳之島）、治井秋喜先生の各民謡教室（徳之島）を対象としたフィールドワークにおいて、様々な取り組みを目にし、先生方の思いに触れた。また、フィールドワークは2002年9月16日から9月28日に実施し、私1人で回った。

3. 調査で得られた実践例と課題

各学校及び民謡教室では、奄美民謡を指導するにあたり、それぞれの方法で昔のものを今に伝えていた。これらの方法を大きく3つに分けることができる。

一つ目が昔ながらのスタイルで歌う方法である。「うた遊び」といった島うた本来のおもしろさを伝えることができるが、「うた遊び」ができるのは技術のあるうた者であり、現代の子どもたちがいきなりできるものではない。したがって、子どもたちのできる範囲で指導していくことが必要である。

しかし、やはり現代においては、昔ながらの伝統ある歌い方よりも、見ていて楽しい演奏を好む人が多いのではないだろうか。この点から、二つ目の現代的にアレンジを加え、エンターテインメント性のあるものを作り上げる方法は、昔のものを今に伝えるための斬新な方法として享受されるのだと思われる。また、「見せ物」としてだけでなく、取り扱う奄美民謡がどのような背景で生まれ、どのような意味があるのかを、子どもたちに理解させることも重要なことである。

三つ目は年齢の低い頃から奄美民謡を取り入れ、子どもたちの身近なところに、自然に奄美民謡がある環境を作る、という方法である。この方法で指導されている子どもたちにとっては、奄美民謡を学習するのは当たり前だと思っているのではないだろうか。この時期に奄美民謡に触れることで、誰でも歌える かえるのうた や チューリップ のように、 行きゆんにや加那 などの島うたを誰もが歌える、ということにつながると推測できる。

各学校及び民謡教室は、共通する部分も見られたが、どこも違った方法で、子どもたちに奄美民謡を伝承していた。その方法の違いは、教える側の意識の違いが大きく関わっている。

例えば「昔ながらの方法で教えたい。」と考える徳之島の治井秋喜先生は、「うた掛け」形式（うた遊び）や即興アレンジを採用し実践していた。また、「一斉指導には限界がある。」とする住用村立東城中学校の豊國淳子先生は、生徒一人ひとりに合わせ、五線譜やタブ譜などの楽譜の工夫をしていた。

（要旨作成：星村倫子）

「創作和太鼓 - 関西における現状の分析 - 」(大阪音楽大学修士論文)

要旨：

現在、全国に25,000もの「創作和太鼓」グループが存在するといわれる。ここでいう「創作和太鼓」とは太鼓を一つの演奏ジャンルとして扱うことを条件とし、「創作和太鼓グループ」とは太鼓を演奏することで活動を維持する集団を指す。

本発表では関西における「プロ、アマチュアの活動」、「企業経営の一部門としての和太鼓」という視点から、2002年時点での「グループの傾向」、及び「グループを形成する要因」についてグループの具体的な発言、活動から論じ、「創作和太鼓」の現状を考察した。

「創作和太鼓」は戦後に誕生したジャンルだが、なかでも1970年に誕生した「鬼太鼓座」は欧米での活動を広げ、国内でも支持者を増加させた。関西では80年代後半からプロが誕生し、現在7グループ存在することが明らかとなった。これらは「日舞 飛鳥流」と「西洋音楽」という2つの流れから派生し、和太鼓のみから異種ジャンルとの共演まで幅広く展開する。彼らは「世界に誇る日本の楽器」と捉えつつ「伝統にとどまらない可能性」を強調し、日本的要素（衣装や所作）を重んじながらもその表現は民族性を超えた独自の意味を太鼓に託している。

一方、アマチュアの場合、海外グループとの比較から4つの傾向が挙げられた。「伝統重視（全国各地の祭り囃子等を奏することで自らの活動を伝統的なものとして位置付ける。なお、ここでの

「伝統」とはあくまで奏者の言及による定義に基づく）、「愛好家（仲間同士の親睦を目的とし、レベルや舞台発表は重視しない）」、「セミプロ（第2と対照的）」、「人権問題の表出（差別撤廃の文化広報活動として演奏）」である。アマチュアの場合、「音楽追求」ととどまらず、「リーダーの存在」、「伝統の追求」、「アイデンティティの表出」がグループを形成する要因となっている。また、80年代には和太鼓を事業領域とする企業が登場し、企業の教則ビデオ等により太鼓を学ぶ機会がなかった教師や小さなアマチュアグループは活動のノウハウを簡単に習得できるようになった。だが、こうした企業の波及効果はプロ奏者らにある種のジレンマをもたらした。「各地の芸能」を素材としたビデオが普及し、それらを「伝統」として提示することで「本場のよさ」を損なうことにならないか、という危機感である。「創作和太鼓」はダイレクトに日本らしさを提示することが可能なため安易に日本の「伝統」として提示されることも多いが、奏者は必ずしも「伝統」という括りではおさまらない独自の価値を和太鼓に見出している。同時に自由な発想で接することが可能となったことで既存の枠を越えて発展を遂げた。「創作和太鼓」が国境を越えて広がる現在、今後は「自分に合う表現を見つける」ことが必要な時代であるといえよう。「創作和太鼓」はいまや伝統的な楽器を使って再生した「新しい芸術」として発展しているのである。

（要旨作成：桑原瑞来）

報告：

最近日本音楽の周辺が活気を呈している。邦楽器に取り組む人も増えてきた。音楽書やCDの出版も盛んである。さらには指導要領が改訂され、学校教育における日本音楽の導入が推進されるようになった。今回の発表は、いずれもこうした変化の真直中にある現代日本の音楽文化をフィールドワークしたものである。

最初の発表は、音楽教育について。奄美諸島の学校教育現場を調査し、民謡教育の現状を整理・分類するというものである。地域の豊かな音楽文化を近代的教育システムに組み込むという困難な課題に関して、解決策の実例が三つに分類されて報告された。私が特に興味深く思ったのは、五線譜化や西洋風のアレンジといった民謡の合理的変形は、初学者にとっては近付き易くなるものの、本来民謡が持つ味わいを損なうことになるという現場の意見である。教える人々が民謡を熟知しているがゆえに気付くことのできる困難であり、自信と誇りを持って奄美諸島の民謡を教え、また伝えようとしている教師の姿が感じられた。

質疑応答では、民謡教育は正課授業と課外授業のどちらに組み込まれているのかという質問や、奄美諸島の民謡といわゆる日本音楽との関係を土地の人々はどのように理解しているのかという質問など、視線と分類に関する質問が相次いだ。それに対して発表者は現場の実例に基づいて詳しく説明し、充実した質疑応答となった。民族音楽学を念頭においた質問もあったが、発表者の関心は専ら民俗音楽を用いた実践的な音楽教育にあったようだ。

邦楽教育の充実など、今後ますます柔軟な取り組みを求められる学校教育の現場において、音楽学の果たす役割はさらに大きなものになっていくに違いない。

続く発表は、創作和太鼓に関して。関西の創作和太鼓グループを調査して現状を把握し、グループ活動の意味を考察するというものである。まず、フィールドワークのプロとアマチュアという観点から創作和太鼓グループが検討され、次いで、最近出現した創作和太鼓活動を商品化する企業の実態が報告された。

相当の手間を掛けて創作和太鼓の担い手の言葉を集めたのであろう。言葉を整理し、引用することによって次から次へと示される事実には強い説得力があった。ただし、内容過多気味とも感じられた。加えて発表の前半部では、多くの言葉を集約して一見雑多に見える和太鼓グループの傾向を調べて分類するという研究方法が採られていたのに、後半部では特定の個人の言葉に比重が置かれていたので、結論が見えにくくなってしまったように思われた。データの取捨選択を試みるならば、発表全体が引き締まり、論旨が明快になったのではないだろうか。質疑応答の際にも説明があったように、創作和太鼓は模索期にあり、今まさに多くの新しい試みが繰り広げられている。実態調査

だけでも一仕事であり、研究にはかなりの困難が伴うだろうが、いっそうの努力を期待したい。

なお、本発表は地域音楽文化研究としても発展性があるかもしれない。調査地区を特に関西方面に限定したことについては特に説明がなかったが、企業化によって地域の特色が均質化されつつある現在、ある特定地域の継続調査によって伝統に対する考え方の変化を調査することも可能だろう。

研究対象が身近なテーマであるということもあって、質疑応答は白熱したものになった。しかしながら自分の専門分野に引き付けるかたちの質問やコメントが比較的多く、傾聴すべき点も多々あったものの、発表が話題提供と受け止められていたようにも見受けられた。

二つの発表を聴き、あらためて感じたのは、日本の伝統音楽に重点をおいた指導要領の改訂や創作太鼓の企業化は、住民達が地域の音楽文化に目を向けるきっかけとなっているということである。また、質疑応答でも言及されたが、そのことは同時に、時として民俗芸能をそれが属している地域文化という文脈から切り離して流通させたりもするということである。軽やかに流布しながら、新しい日本音楽が生まれていくのだろう。

(報告者：上野正章)

定例研究会記録

第214回定例研究会

日時：2003年6月14日 14:00～17:00

場所：国立民族学博物館 第3セミナー室

内容：論文発表

卒論発表：田辺菜美子「ブータンの音楽における近代化の様相と伝統の保持」

卒論発表：松木彩美「列車の接近・発車時における音楽型サイン音の実態」

修論発表：川端美都子「アルベルト・ヒナステラ作品におけるパンパの表象」

修論発表：前田けい子「学校教育における日本の伝統音楽の新しい位置」

「ブータンの音楽における近代化の様相と伝統の保持」(相愛大学卒業論文)

要旨：

私は論文のテーマを、「ブータンの音楽における近代化の様相と伝統の保持」にした。きっかけは2001年に初めてブータンを訪れた際に目にした、想像以上に近代化が進んでいる街並みにあった。そこから、近代化が進むブータン社会と音楽の関係に興味を持ち調査し始めた。しかし、ブータンの音楽に関する文献が少ないこととその内容が古いことから、現地へ赴きフィールドワークを行い情報収集をすることにした。したがって、この論文の多くはその時のインタビューに依拠している。

ブータンはヒマヤラ山脈の東に位置する小さな王国で、人々はチベット仏教に厚く帰依している。自然環境への配慮と伝統文化の保存に力を入れ、急ぎすぎない開発を目指しているブータンにも年々近代化の波は押し寄せ、それは音楽にも影響を及ぼしている。

ブータンの音楽は宗教儀礼音楽と民族芸能の大きく2つに分けることができるが、今回は後者の民間で伝承されている伝統音楽と近代化の様相に焦点を当てた。

近代化の様相として、インド・ネパール音楽と欧米音楽の影響を取り上げた。両者は、ブータンの特に若い世代に多大な影響を与え、音楽ジャンルの革新的な広がりや音楽に対する様々な欲求を高めている。そして、今後さらに音楽環境の近代化が進むだろうと予測した。一方伝統音楽保持の動きとして、ブータン唯一の国内番組「BBS」と民間初のプロの音楽集団「タシ・ネンチャ」の活動に注目した。そして若い世代の伝統音楽離れを解消するために新しく作られたジャンルである、「リグサル」の役割と位置付けが大きなポイントである。これがブータン音楽の伝統と現代の音楽センスを融合する、魅力的な音楽として発展していくかが問われている。そして最後に、今後のブータンの音楽における展開を予測し結論とした。

(要旨作成：田辺菜美子)

「列車の接近・発車時における音楽型サイン音の実態」(京都教育大学卒業論文)

要旨：

本論文は、列車の接近・発車サイン音の変遷、実態を明らかにし、その地域性を考えようとするものである。具体的手順として、観察対象を東京の山手線と大阪環状線に絞り、電車が到着してから発車するまでの様子を全ホームで撮影した。そして発車サイン音一覧を作成し、メロディを採譜し、これらの分析に基づいて考察した。

「サイン音」とは「生活や仕事の中で記号として使われている音」とする。列車に関するサイン音にも「踏切の音」「券売機のボタン操作の音」など様々なものがあるが、本研究では列車到着時と発車時のサイン音に限定した。「音楽型サイン音」とは、音楽で鳴るサイン音を指す筆者の造語で、列車到着時のサイン音を「接近サイン音」、列車発車時のサイン音を「発車サイン音」、この2つのサイン音の総称を「サイン音」と呼ぶこととした。

分析の結果、大阪環状線には電車到着中の接近サイン音があったが山手線には無かった。また、山手線では発車サイン音が曲の途中で切られることが多かったが、大阪環状線では曲は最後まで鳴らされた。これらの点から見ると、大阪は親切で丁寧だが、東京は冷たい感じがすると言えるだろう。また、発車サイン音が山手線は18種類であったが、大阪環状線は1種類のみであった。内回りと外回りの発車サイン音を比較すると、山手線は22駅が異なり、残る7駅が同じであったが、大阪環状線はすべて同じであった。これらより、東京の長所は賑やかで個性があることで、短所は音の統一感がないこと、逆に、大阪の長所はシンプルでイメージが統一されやすいことで、短所は駅の個性を出しにくく飽き易いことであるといえよう。一方、山手線と大阪環状線には「発車サイン音は音楽型が多い」、「接近サイン音は全曲鳴る」、「2拍子系の曲が多い」という共通点もあった。

本研究を経て、筆者は発車サイン音の理想を「山手線(大阪環状線)のイメージを作り上げ、内回りと外回りの区別が分かり易く、注意喚起の役割を果たすがうるさくないもの」と考えた。これは視力が弱い人々に特に頼れるサイン音となるだろう。具体的には、メロディは1種類で、内回りと外回りで音色を変える方法はどうか。

(要旨作成：松木彩美)

報告：

鎖国状態の続いていたブータンでは、ここ二十数年、近代化の波にさらされている。その急激さゆえ(日本語の)先行研究が少ないブータン音楽の新たな局面を、外国文化(主にインド)の開放政策やマスメディアの状況を中心に、発表者自身による現地取材の成果を交えて示した発表。行きつ戻りつするその様相はなかなか面白い。開放の反動として伝統文化の振興がはかられたり、ラジオやTVの番組は大半を外国に依存していたり(英語は高普及率)、その混沌から新たな音楽ジャンルが浮上したりと、限られた資料のなかでダイナミックな状況を伺わせた。

とはいえ瞬間風速だけで描くには無理があったか。音楽が変化する原因を社会的な状況へ還元していくという論法が気になった。質疑応答において、近代化の具体的な局面について補足を促すものが多かったところをみると、これは評者個人の印象にとどまらなかったようだ。

具体性を求める質問といえば、たとえば、外国文化の要素は音楽においてどのように表れているのか、であるとか、新しいジャンルであるリグサルの発生過程はどのようなものだったのか、など。前者には、ブータンの民謡の旋律を用いながら電子楽器の導入や西洋風ポピュラー音楽風の編曲がなされる、後者には自然発生だとされているが詳しくは分からないという返答だった。どちらも継続した調査が求められる部分である。

また、現地語における音楽という語は歌謡や舞踊を含めた総称であり、耳でのみ享受する音楽は存在しないという(質疑応答では「存在する」としたが終了後に「存在しない」に訂正)。取材は通訳を介したとのことだが、現地語に通じてネイティブの価値観に迫れば、音楽と社会の密な相互作用をみてとれたかもしれない。

発表者は、まだ間口の狭いブータンにおいて複数の音楽関係者取材するなど、なかなかのバイタリティの持ち主。それだけにこれで終わらないでほしい気がした。

電車がホームを発着するさい、音楽(らしきもの)を耳にするようになったのはいつからだろう。評者は思わず耳を傾けてしまう性質だが、聞き流している人も多いように思う。この「音楽型サイン音(発表者の用語)」の歴史と現状を、東京(山手線)と大阪(環状線)の比較を絡めながら概観する発表である。

列車の発車前に音を鳴らして注意を喚起する慣習は、日本で鉄道がはじめて開業されたときから存在する。現在の音楽型サイン音と、これまで用いられてきた太鼓、鐘、ベルが異なるのは、音響設備を必要とする点。アナウンス設備を手がけていた音響設備メーカーが、音を鳴らす慣習と結びつけて駅構内の音響を一元管理するシステムを開発したようだ。楽曲の制作や管理もメーカー主導である(納入過程も同様ではないかは評者の推測)。ところが実際に流す現場においては、楽曲の途中で端折るなどのさじ加減が存在する。

東京/大阪の比較が軸であったが、発表者の問題意識は明らかにそれをおさまるものではない。知的好奇心により即した論もありえた。とはいえ、まずは新しい音楽的現象に対する目配りを買うべきだろう。質疑応答ではこの現象を学の俎上にのせる可能性をめぐるものが多いように思われた。たとえば、音楽型サイン音が記号であるとすれば、その作り手は、それによって何をどこまで指し示そうと意図しているのか。あるいは、それらの「音楽」は聴覚特性やスピーカーの性能をどの程度考慮しているのか。これらに明確な返答がなかったが、作り手の想定する聴き手や聴き方についての探求は音楽美学の一局面である。

ところでレジユメに示された関連ホームページに、鉄道マニアによるものと思われる音楽型サイン音についての膨大な調査報告がある。日常風景から音楽を切り抜いて取り出す耳が形づくられているといえよう。この能力の先にあるものはなんだろう。音楽研究の射程が問われているように思えた。

(報告者:今田健太郎)

「アルベルト・ヒナステラの作品におけるパンパの表象」(大阪大学修士論文)

要旨:

アルゼンチン作曲家アルベルト・ヒナステラ Alberto Ginastera (1916-83年)の作品には、アルゼンチンの民謡や地方音楽のリズムが顕著である。そのためか、先行研究では、作品における「民族性」や、さもなければ彼の作品における「現代音楽的」な部分にのみ焦点を当てて語られる傾向にあった。その理由として、従来の作曲家自身による作品区分の問題が考えられる。先行研究においてヒナステラの作品は、その作品区分を踏襲する形で、「民族性」や「現代音楽的」という対立項によって単純化される傾向があった。よって、修士論文においては、そうした「単純化」を計る前に、一旦「民族性」と言われているものの中身を探っていく過程を要したのである。

すなわち、アルゼンチンの広大な地域を占める大平原「パンパ」をキーワードとして、ヒナステラの作品を分節していくことが本発表のねらいであった。そのため、ヒナステラの作品《パンペーナ第1番》から《同第3番》までの「パンパ風」と題された連作から、具体的に地方音楽の要素を抽出することで、どのようにそれらが「パンパ風」をテーマに用いられているのか見ていくという広義での分析を行った。そこで明らかになったのは、同じアルゼンチン音楽とはいえ、歴史やその起源が異なる2つの地方音楽が同時に用いられていることである。

これら「異質な」音楽の同居は、ただの偶然なのであろうか。発表者が注目した1つの共通項の可能性は、これらの音楽の担い手であった「ガウチョ」という牧童の存在である。ガウチョは、「パンパ」という場所とともに、1800年代後半から1910年代までにかけて、アルゼンチンの「ガウチエスコ」と呼ばれる動きにおいて、国家の象徴として諸芸術分野において、多く描かれていたのである。

この存在は、アルゼンチン史において、決して一枚岩的な存在ではない。19世紀初頭のアルゼンチン国家の独立から19世紀末の近代国家としての発展の過程で、ガウチョは現実と国家精神の理想としてのガウチョ像と乖離していく。そうすると、「パンパ、ガウチョ=民族性」という前提には

疑問をもたざるを得なくなる。もちろん、その解答はヒナステラの作品の分析からだけでは充分ではない。今後、パンパやガウチョのもつ重層性という時間軸上に、改めてヒナステラの作品を置く必要がある。

(要旨作成：川端美都子)

「学校教育における日本の伝統音楽の新しい位置」(大阪大学修士論文)

要旨：

新学習指導要領による学校教育における日本の伝統音楽の新しい位置づけは、長きにわたって望まれていたことの実現であり、その展開が期待されるものである。今回の音楽教育における日本の伝統音楽の位置づけが確固たるものとなるよう、その手立てとして、充実した教師の研修会の開催が望まれる。

学校教育における日本の伝統音楽の指導を考えるにあたって、学校教育以外で日本の伝統音楽がどのようなかたちで教授されてきたのか、その軌跡を振り返ってみる必要があると感じた。そこで第1章においては、これまでの日本の伝統音楽の一般的な教授法について、江戸時代以来の伝統的教授法、明治・大正・昭和における教授法を、文献によって整理し、近年の民間における教授法を、自らの実践によってまとめた。

第2章においては、学校教育における日本の伝統音楽の変遷を、学校教育における日本の伝統音楽の歴史、従来の学習指導要領、新学習指導要領による日本の伝統音楽、と順に探っていった。

第3章は、日本の伝統音楽をめぐる指導者研修会について、フィールドワークや調査票などを実施してまとめたものである。研修会の内容と評価・考察、研修会の効果、研修会の実施状況、研修会の意義と今後を探究した。

第4章では、学校教育におけるこれからの日本の伝統音楽のあり方を論じた。研究を通して検証・考察したことにより明確になったのは、研修会の今後ますますの充実、楽器不足の解消、外部講師の派遣、時間の確保、鑑賞会の開催の必要性である。学校教育における日本の伝統音楽の新しい位置がしっかりと築かれ、発展していくよう、様々な研修会、多様な実践、より深い研究を今後すすめていくことが必要である。

(要旨作成：前田けい子)

報告：

川端氏は、従来のヒナステラの作品区分はいかにそれが新しい区分を提示するものであったとしても、結局は「民族性」の概念の中身を問い直すことなく用いているにすぎないとし、ヒナステラ作品における「民族性」の概念再検討の必要性を訴える。そこで氏は、「アルゼンチンの大平原パンパ」風を意味する連作「パンペアナ第1～3番」の分析を通して、そこでの「パンパ風」の中身を探り、さらにパンパの表象＝民族性という単純な図式を乗り越える何かをそこに見出そうとする。

発表では特に「パンペアナ第2番」の中間部を例にとり、チェロとピアノが受け持つそれぞれのパートに、トリステとミロンガという起源も発展してきた場所も異なるふたつの地方音楽のリズムが同時に現われていると考え、それはパンパにかつて居住していた牧童ガウチョの二重性（自由を重んじる勇敢な漂泊の民としてのかつてのイメージと、その後アルゼンチンの近代国家としての発展とともに一定の地に定住せざるを得なくなった農業労働者としての現実）とも重なりあうもの、つまるところそれはガウチエスコ運動を始めとする19世紀末アルゼンチンの複雑な社会状況との関連として捉えることができる、との見方を示した。

質疑応答全般を聞いての感想をひとつ。発表者が「何気なく聴き逃してしまいそうな」と言う通り、確かにこのふたつの地方音楽のリズムは、譜面におこす事で、どこにでもありそうな単純なものにしか「見え」なくなる。しかしおそらく川端氏は、発表では簡単にしか触れなかった事実、すなわちトリステが18世紀以前から存在していたペルー起源のパンパ地方の古い音楽である一方で、ミロンガが近代国家としてアルゼンチンが発展してゆく19世紀後半に、都会ブエノス・アイレスとパンパとが接触する地域「いわば新旧の価値観がせめぎあう場所」で生まれたという事実をもフィ

ールドワークから肌で感じており、こうした見方を提示するに至ったのだろう。とはいえ今回、時間的な制約からリズム的側面のみを提示したこともあいまって、単に音楽の二重性をガウチョの二重性にそのままあてはめたかのような印象を与えていたのは残念であった。「民族的」という単純化された表現ではない、その背後にある複雑な様相をも明らかにしようとする意欲の一方で、その感覚的な拠り所を一体どう処理するのか、またそのプレゼンテーションの方法はどうあるべきかなど、深く考えさせられる機会となった。

前田けい子氏の発表は、新学習指導要領によって新しく学校教育のなかに位置付けられることになった日本の伝統音楽について、とくに指導者研修会というものに着目しながら、その導入の経緯をめぐる様々な事象について考察しようとするものであった。学校教育への日本の伝統音楽導入に際しては今後解決してゆかねばならない様々な課題が挙げられるが、氏によればその最大の課題は、指導者側の日本音楽に対する絶対的な知識・経験不足の解消であるという。こうした観点から氏は、教師を対象とした指導者研修会をフィールドワークの対象とし、発表ではその詳細な報告が行われた。

評者が気になったのは、氏のフィールドワークや発表のなかに、「問い」というものが殆ど感じられなかったことである。氏はややもすれば安易に、本研究によって学校教育における日本伝統音楽の「あるべき姿」やそのために「今後なすべきこと」が明らかになるとか、「充実した教師の研修会の開催が望まれる」などの文言を繰り返すが、「あるべき姿」や「なすべきこと」そのものを深く掘り下げたり、一体何をもって「充実した」ことになるのかについて触れることはなかった。肝心な部分になるとなぜか「かけがえのない日本の伝統音楽」とか「音楽のすばらしさ」などといった一般論へと逆戻りしてしまうのである。

質疑応答の際に示された、「大阪というひとつの地域においてさえ多数存在する流派の違いを現場ではどう教えるのか、そこで生じるであろう初心者の混乱はどう解消されるのか」といった問いに対し、前田氏個人の意見どころか、研修会主催側の意識さえも報告できなかったのは非常に由々しき問題である。修士論文では江戸以来の伝統的教授法から近年の民間の教授法までをもおさえているのだから、そうした作業プロセスのどこかに発表者独自の視点を意識するきっかけは潜んでいたはずである。精力的に行われたフィールドワークの成果を最大限に活用するためにも、無意識のうちの視点をまず意識化することが今後の最大の課題だといえよう。

(報告者：谷正人)

福岡正太「民俗音楽から民族音楽へ - 小泉文夫の民族音楽学の展開 - 」の報告は次号に掲載いたします。

研究発表申し込みについて

西日本支部の定例研究会での研究発表申し込みは下記までご連絡ください。
〒570-8555 大阪府守口市藤田町 6-21-57 大阪国際大学人間科学部 藤田研究室
電話：06-6902-0791 ext. 2568、fax：06-6902-8894 (代表)
e-mail: tfujita@hus.oiu.ac.jp

入会申し込み・住所変更について

入会ご希望の方は、80円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。会員の住所等の変更についても本部事務所へお知らせください。
〒110-0001 東京都台東区谷中 5-9-25 第2八光ハウス 201号 (社)東洋音楽学会
電話：03-3823-5173、fax：03-3823-5174、e-mail: LEN03210@nifty.com

発行：(社)東洋音楽学会西日本支部 編集担当：上野正章
〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山 469 大阪芸術大学音楽学科 月溪研究室気付
e-mail: tukitani@osaka-geidai.ac.jp、fax: 0721-93-7914 (月溪気付)
